



## 「創造農村」という一筋の希望

「過疎をクリエイティブに生きる戦略」をサブタイトルとする『創造農村』(学芸出版社)がこの春、出版された。本書の編著者でもある佐々木雅幸氏の創造都市論にはかねてより注目してきた▼創造都市は「市民の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の柔軟な都市経済システムを備え、グローバルな環境問題や、あるいはローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような『創造の場』に富んだ都市」と定義される。その創造都市論は、①世界都市を指向してきた大都市の持つ創造性の評価見直しとその内部にある創造地域・境界の重視、②人口減少が激しい地方圏の小都市や農山村における創造都市像としての「創造農村」への着目、という二つの方向に拡張しているとされる▼「創造農村は役割の固定から都市と農村を解放し、都市住民の個人的なニーズを変換して農村で活かし、逆に農村の持つ価値を地域イメージによって都市に提示し投資を促す、都市と農村の新たな関係を構築する可能性を持っている」とする。ポイントとなるのが①やりがい重視の仕事観、②ソフトコントロール(緩い管理)、③カジュアルアウトドア志向、④仕事ではなくまず居住地を決める、「創造階級」なる人材の確保と文化・自然を活かしていけるかだ▼本書に触発されてIターンによって人口増加と活性化を実現してきた徳島県神山町を訪問、「農村の生態系と都市の現代文化が融合し、あらたな価値を生み出していくだろう」ことを実感してきた。(土着菌)